

〔翻刻解題〕

## 榎尾山 西明寺蔵 月潭道澂自筆資料―『明忍律師塔銘』『西明寺鐘銘』 翻刻と解題

関口静雄・高松世津子

【解題】近世戒律復興における律僧の交流、及び明忍の対馬における事績

近世戒律復興運動の祖師俊正明忍(一五七六―一六一〇)は、朝廷官吏中原氏の生まれで、幼少期に神護寺晋海僧正に仏教を学び、十一歳で官職に就いたが、その後晋海の弟子として出家し、慶長七年(一六〇二)二十七歳の時、晋海・慧雲・友尊・玉円と共に、鎌倉期戒律復興運動の叡尊(二〇二―一二九〇)らが行ったと同じ方法で自誓受戒をした。これにより近世期の戒律復興運動が始まった。

叡尊らの自誓受戒とは、三師七証による従他受戒と異なり、持戒僧の不在により戒の相承が不可能である場合、好相行で滅罪を果たし、さらに好相感得した上で、仏菩薩の形像の前で菩薩比丘になることを誓い、仏から直接三聚浄戒を受戒するものである。それは具足戒を別受ではなく、三聚浄戒の摂律儀戒として同時に受けるものであった。好相行は諸仏菩薩による受戒承認の現れである「好相」を感得するために心身の清浄化を目指して過去の罪を発露・懺悔する行で、『梵網經』第二十三輕戒を根拠とする。

好相の内容も『梵網經』第四十一輕戒の「好相とは、仏来りて摩頂し、光を見、華を見る種々の異相にして便ち罪を滅することを得るなり」という一文などの経説が根拠とされた。

自誓受戒後、明忍らは、かつて晋海が徳川家康から下賜された神護寺三百石のうち三〇石余を晋海から分与され、榎尾山平等心王院西明寺を律僧坊として再興した。その後、明忍は中国・明での別受戒相承を決心し、約一年間をその準備に費やし、僧坊の運営を慧雲ら同志に託して、慶長十二年(一六〇六)七月十六日<sup>1</sup>、随行の浄人道依とともに京を発ち、平戸を経て対馬に渡った。対馬では持戒生活をして渡航の機会をうかがったが、国禁により果たせぬまま、慶長十五年(一六一〇)初夏に罹病し、六月七日に三十五年の生涯を終えた。

明忍示寂の後、自誓受戒僧らが中心となり榎尾山西明寺・青龍山野中寺・大鳥山神鳳寺の「律の三僧坊」とその末寺などが発展し、法華宗・臨濟宗・曹洞宗・天台宗・浄土宗など他宗にも戒律復興が伝播した。新来の黄檗僧も律僧たちと交流し影響を及ぼし合った。本稿で紹介する黄檗の月潭道澂が撰述した『榎尾山西明寺俊正明忍律師塔銘』一卷(略称『明忍律師

塔銘」と『山城州葛野郡横尾山西明律寺平等心王院鐘銘<sup>并序</sup>』一卷（略称『西明寺鐘銘』）は平等心王院の律僧と黄檗の月潭道激らとの交流の中で為された事績の代表的なものである。

また西明寺蔵の舍利に関する次の二資料が注目される。『奉施入横尾平等心王院常住舍利仏像等事』<sup>2</sup>は、仁和寺尊寿院阿證（一六二一—一六五六）が、正保四年（一六四七）に、自身が秘蔵していた唐招提寺舍利・東寺舍利・叡尊舍利を自らの「一期之間」に限って西明寺に施入することを記したものである。阿證は秋田藩主佐竹氏の世子とされながら廃嫡にあい、その後、横尾で寛永十二年（一六三五）に自誓受戒した行空宛然により、寛永十五年（一六三八・二十七歳）に横尾で三帰五戒を受けた。そして横尾での修業の後、仁和寺の一品親王覚深に師事して、正保三年（一六四六・三十五歳）に覚深から尊寿院号と寺地を賜った。慶安三年（一六五〇・三十九歳）に佐竹家から二百両の援助を得て、翌年には院跡が再興され尊寿院に入った。その後、密乘院宥雄のもとで密教の奥義と護摩火壇を修学し、承応元年（一六五二・四十一歳）により伝法灌頂を授けられた。<sup>3</sup>阿証は戒律復興より真言密教を重視し、その道を究めた人だと言える。そしてもう一つの舍利資料『奉寄進山城州横尾平等心王院仏舍利事』<sup>4</sup>は、万治四年（一六六二）に一通妙愚禪師が自身の所持する舍利を寄進した際の書状である。この二資料については別稿で詳述した。<sup>5</sup>

律の三僧坊において近世期を通して（野中寺では明治中期まで）、自誓受戒を継続した。近世において戒律を重視する律僧らが各宗派に存在したことは、倫理観の形成や社会福祉実践など、当時の社会に少なからぬ影響を及ぼしていたと推察される。例えば真言宗の浄厳・慈雲、日蓮宗の元政、天台宗安楽律の靈空や三井寺義瑞、浄土宗の忍激・靈湛らの活動や、野中寺

慈忍慧猛より受戒した黄檗僧鉄眼道光が果たした一切経版行の大業がそれである。このような近世期の自誓受戒僧や、彼らが授戒した僧の行実、さらには各宗律僧の相互交流については研究の余地があり、その究明は近世期仏教思想史の重要な課題である。

対馬で明忍が記した書簡や記述資料については、①『祖師之消息』（和文の書簡集）、②『祖師消息』（漢文の仏教関連記述集）、③『明忍律師御筆止観文』（師晋海僧正に宛てた遺言）、④『明忍律師臨終瑞相』（明忍臨終時感得）、⑤『忍』通受別血脈』（自誓受戒の血脈図）（③④⑤は慶長十五年）、⑥『科分』（慶長十四年）が西明寺に所蔵される。<sup>6</sup>②の一部と④についてはすでに論じた。<sup>7</sup>

右のうち①『祖師之消息』は明忍が平等心王院僧衆や慧雲に宛てた自筆書簡九通を一卷に纏めたもので、対馬での明忍の状況や交流・渡航の意思、また平等心王院の内実を示す記録であつて貴重である。読解・分析が続けているが、今日までに得られた知見若干を記しておきたい。

明忍は対馬での一年目は対馬府中に住み、二年目には、当時家康の命で対馬に配流されていた日蓮宗不受不施派の指導者日奥（一五六五—一六三〇）の宮谷居所である本清浄心院の敷地内草庵に住んだ。日奥は日蓮の主張を重視し、秀吉や家康の命に背いて不受不施義を徹底したため、家康に対馬配流を命じられ（大阪討論、慶長五年（一六〇〇）対馬に下向した。しかし当地では厚遇され、慶長七年以降は宮谷にある対馬藩主宗義智の父の元隠居所を贈られた。日奥はこれを本清浄心院としたのである。<sup>8</sup>二年目には同敷地内に居住した明忍だが、慶長十四年八月から遷化まで、浄土宗海岸寺に近い豊満岳山中の、茅壇の地に住んだ。

さて①により、明忍と日奥に、宗派や主張を超える交流があったことが明らかになった。一通目（対馬到着後間もない慶長十二年十月十日付）には「日

奥（日蓮宗）致参会候。不慮ノ事。其外都人有之躰候」とあり、日奥が思いがけず明忍らの法会に参会したこと、日奥には京より熱心な信奉者が隨身していたことが分かる。二通目には日奥の手紙の便に明忍の手紙もつけたこと、七通目には法華経関係の経書を日奥から借りていたことが記されている。また五通目には「甘心之衆両三輩有之、戒学等勤修ノ躰、慥ニ承伝候。かやうの事聞候へば、万々一剃髮事も候」とあり、対馬島内には戒律復興に関心を持つ人が二、三人いるとし、槇尾で剃髮する可能性があると記している。平等心王院の第二回自誓受戒僧・賢俊良永（一五八五—一六四七）も、その一人として考えられよう。

当時、僧が私的に大陸に渡ることは不可能だった。秀吉の朝鮮出兵から間もない、朝鮮通信使が再開された頃であり、国禁が厳しく、緊張の中で対馬藩主宗氏が朝鮮との国交を成立させるために奔走している時期であった。そうした時代背景のうちに明忍は対馬に歿した。明忍は貧困に陥り孤独に過ごしたと大方はみられているが、①⑥の資料によって、明忍が対馬において如法律僧としての生活を実践しながら他宗の僧や世俗の人とも交流し、京の親族・友人・槇尾の弟子や同志、特に慧雲や晋海僧正など多くの旧知と手紙をやり取りし、生き生きと日々を過ごしていたことは明らかである。病魔が明忍の命を奪ったが、それは持戒生活を徹底した故であろう。明忍は対馬において死に向かうような貧困で孤独な生活を送ったわけではなく、最期に臨終瑞相を自筆するほど、切実に生き、また腹の据わった人物であったのではないかと考える。

（高松）

注

1 山口昌志「明忍律師の事績と戒律重視の思想的背景」（『放送大学日本史学論叢』5、二〇一八年三月）は明忍の対馬渡航が慶長十二年であったことを解明している。

2 稻城信子代表『日本における戒律伝播の研究』（元興寺文化財研究所、二〇〇四年三月）所載『西明寺所蔵聖教類』No. 8-7。

3 神宮 滋『仁和寺尊寿院阿證』（イズミヤ出版、二〇一七年一月）五〇頁・六〇頁。

4 注2『西明寺所蔵聖教類』No. 8-11。

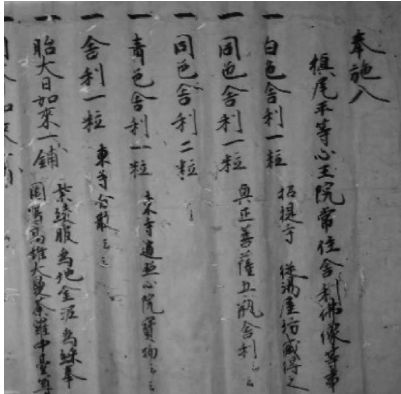
5 高松世津子「叡尊と近世前期律僧における舍利信仰―悲華経―と記述された奇跡をめぐって―」（『日本宗教文化史研究』第二十六巻第一号、二〇二二年五月）

6 注2『西明寺所蔵聖教類』①No. 3-19 ②No. 3-18 ③No. ｷﾔﾁ25ｷﾔ ④No. ｷﾔﾁ26 ⑤No. 3-16 ⑥No. 27。

7 高松世津子「近世戒律復興運動の祖師・俊正明忍の対馬における奇瑞・臨終瑞相をめぐって」（中外日報HP第十七回涙骨賞受賞、二〇二一年）、「近世戒律復興の明忍と了性―その事績と臨終瑞相をめぐって―」（『伝承文学研究』第七〇号、二〇二一年八月）。

8 大谷吾道「新史料仏性院日奥筆『一生御立願十三箇条』について」（『印度學佛教學研究』第四十二巻第二号、一九九四年三月）。

9 前掲5。明忍律師が遷化の時に現れた臨終瑞相を自ら文字で記したという自筆資料が西明寺に蔵される（p. 4右下、明忍自筆『明忍律師臨終瑞相』（注2『西明寺所蔵聖教類』ｷﾔﾁ26））。



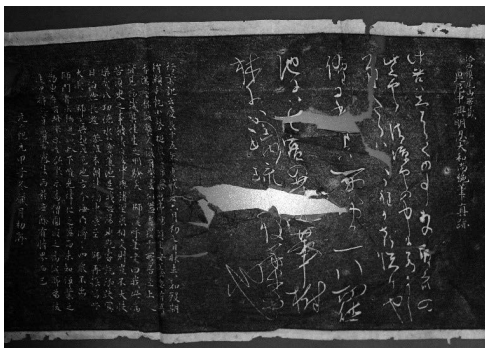
『奉施入楨尾平等心王院常住舍利仏像等事』  
(西明寺)



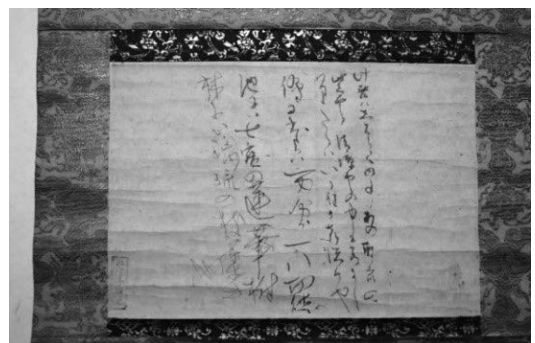
「中祖日奥大上人謫居之靈地」碑  
対馬市宮谷



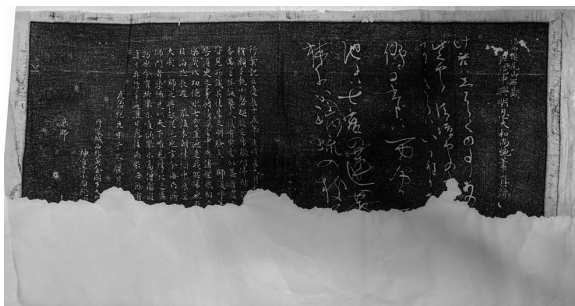
明忍律師坐像 (西明寺)



石刷『明忍律師臨終瑞相』1 (宮島コレクション)



自筆『明忍律師臨終瑞相』(西明寺)



石刷『明忍律師臨終瑞相』2 (新出) (宮島コレクション)

## 【解題】明忍律師塔銘西明寺鐘銘一斑

黄檗の禅僧月潭道澈（道澄とも。一六三六—一七二三）の自撰自筆資料を二篇翻刻紹介し、若干の愚考を添えたい。槇尾山西明寺所蔵の『槇尾山西明寺俊正明忍律師塔銘』一卷（略称『明忍律師塔銘』）と『山城州葛野郡槇尾山西明律寺平等心王院鐘銘』<sup>并序</sup>一卷（略称『西明寺鐘銘』）である。<sup>1</sup>なお俊正明忍（一五七六—一六一〇）の茶毘処であった長崎県対馬市厳原町の国有林豊満岳山中には明忍の墓塔が現存する。墓塔裏面の『中興槇尾山西明寺俊正明忍律師塔銘』（略称『裏面塔銘』）は月潭撰『明忍律師塔銘』を陰刻したものだが、書丹は月潭嗣法の高弟蘭谷元定の手によるものだから、紙面と碑面の筆体に相異があるのは当然ながら、両塔銘には本文と用字に若干の出入りがある。後顧の資として右二篇に併せて翻刻紹介しておきたい。併三篇の翻刻は後掲する。

西明寺所蔵資料については西明寺御住職高岡義寛師の格別の御高配をもって写真撮影等調査と翻刻本文の公表を許された。高岡師の御鴻恩に心より謝意を奉る。なお事情があり、右二巻の体裁法量等書誌についてはこれを割愛した。

### ※

槇尾山平等心王院西明寺の中興開山俊正明忍は慶長十五年六月七日対馬茅壇の小庵で病没した。その最期を堯遠不窆撰『明忍律師之行狀』<sup>2</sup>（略称『仮名行狀』、承応元年（一六五二）十二月十八日成）は「慶長十五、其病惱頻ニ發ル其時小杖ヲ以テ疊ヲ打稱名念佛シテ魂ヲ安養ニウツサント巧時ニ忽ニ紫雲タナヒキ」と伝え、また深草元政撰『槇尾山平等心王院興律始祖明忍律師行業記』<sup>3</sup>（略称『行業記』、寛文四年（一六六四）六月四日成）に「苦<sup>ク</sup>甚<sup>シ</sup>即<sup>チ</sup>執<sup>テ</sup>

短杖<sup>ヲ</sup>叩<sup>レ</sup>席<sup>ヲ</sup>唱<sup>ヘ</sup>佛號<sup>ヲ</sup>願<sup>フ</sup>生<sup>セン</sup>「安養<sup>ニ</sup>」とあり、月潭道澈撰『槇尾山平等心王院故弘律始祖明忍和尚行業曲記』<sup>4</sup>（略称『行業曲記』、貞享四年（一六八七）十二月十日成）に「初七日味爽知歿期稍瀕手執小磬槌敲坐席驟唱佛號願生安養」とあって、いずれも明忍が数日ほど木杖で昼筵を叩きつつ、称名念佛のうちに入滅したと伝えている。明忍は念仏往生であったのであり、結跏趺坐あるいは端坐のいわゆる坐死であった。

おおよそ僧の入滅姿勢は釋迦涅槃の頭北面西、鑑真和上の結跏趺坐、また西大寺叡尊やその高弟良観房忍性の端坐、一向俊聖の立往生等々が知られるが、右の『行業曲記』の記述を重んじれば明忍の入滅姿勢は叡尊・忍性に同じく端坐であったと推量される。明忍は没する数月前の正月二十六日に記した「自作<sup>ノ</sup>自誓<sup>ノ</sup>血脉」（『仮名行狀』所載）の中央に「釋迦弥勒・叡尊」と図示し、自身が叡尊の直末流にあることを強く意識しているから、平生の行実をはじめ、その最期の入滅姿勢までも信奉する叡尊に倣い、端坐入滅を常々の臨終用心としていたものと推量される。なお戒山慧堅撰『律苑僧宝伝』を検すれば、突然死を除き律僧の入滅姿勢は坐死がきわめて多いことに気づく。

明忍の遺骸は豊満岳茅壇で荼毘され、そこに標の松が植えられた。その間の事情を『行業曲記』は九十余歳の一華菴老僧以僊の昔語りとして伝えている。

某童時曾見忍師始從洛至托居府内宮谷後厭人緣稍譁又移茅壇每受府治西南夷崎山水奇絶經行其間鄉人不知其名但喚京都道者耳海岸精舍主僧智順欽師戒行往來密邇及圓寂後為立牌位至今尚存闍維之所不堅宰堵只栽松樹一株而已茅壇四山採伐殆盡獨其一株合抱偃蹇翠色鬱然斧斤莫敢侵云

この老僧以僊の昔語りを直接耳にしたのは洛東東山建仁寺長老松堂宗植

である。松堂（一七一四年没、七十四歳）は対州修文職の幕命を承け瞎驢山以酊禪庵歴代二十六世として赴任し、第三十四代輪番（貞享三年（一六八六）三月より元禄元年（一六八八）四月まで）を勤めた<sup>5</sup>。松堂は対馬着任後間もなく自ら明忍の遺蹟を尋ね、また人をして探索せしめ、幼童のころ明忍を見たという九十余歳の以僊に会ったのである。松堂は以僊の語る明忍の往時を筆録し、これを対馬から旧知の月潭に消息したのである。

右にいう海岸精舎主僧智順すなわち心蓮社伝智順は、『海岸寺縁起』（写本一冊、海岸寺藏）によると肥後国佐伯氏、浄土宗神田山知恩寺檀林に学び、永禄九年（一五六六）十月に夷崎にあった潮光庵の三世を継ぎ、寺地を久田道に移し山号寺号を常楽山寂照院海岸寺と改めて中興開山した人で、元和四年（一六二八）十月一日に八十九歳で歿している。とすれば歳若い明忍との出会いはその晩年であったが、戒行をめぐって親近し、明忍の円寂にあたっては位牌を造って供養したのである。その位牌は現在も海岸寺に祀られている。

『海岸寺縁起』によれば、明忍ははじめ府内宮谷の草庵にいたが、人縁の煩しさを厭うて豊満岳中腹の茅壇に移った。郷人は「京都道者」と呼んでいたというから、誰の眼から見ても比丘として律師として持戒持律を厳修する日々を送っていたのである。そうであれば人縁を厭うたのも当然で、しかしそれは尋ね来る客人も少なからずあったということだ。その一人が高野山僧の賢俊良永である。良永（一五八五—一六四七）は後に南山靈嶽山円通寺（高野山真別処）と和州法隆寺北室院を拠点に律幢を掲げた律の巨匠であるが、『律苑僧宝伝』<sup>6</sup>所載『靈嶽山圓通寺賢俊永律師伝』（略称『賢俊永律師伝』・高野山円通寺九世本初金剛撰『三国毘尼伝』（写本、高野山大学図書館蔵）は、二人の出会いを偶然の邂逅だったと伝えている。

右二伝によれば、賢俊良永は添（宗）氏を出自とする対州吏史の子で、妙年にして高野山の僧となり、長じて中性院（中藏院とも）に止住して真言密教を窮め、毘尼道に精勵していた慶長十四年（一六〇九）二十五歳の時、たまたま所用で対馬へ帰郷した折、明忍律師の対馬逗留を知った。良永は明忍に面謁し、戒法の授与を請うたが、しかし明忍はこれを断り、自分が創設した興律の道場たる榎尾西明寺で所願を遂げるべき由を説いたのだった。良永は明忍の勸言に従い、翌慶長十五年十月西明寺で沙弥戒を受け、その翌十六年三月には自誓受具して比丘となった。しかしその年の夏安居を終えると、自説の「一夏竟離依止法」を主張して高野帰山を希望したが、「五夏依止法」を遵守する慧雲寥海・友尊全空ら榎尾一山僧衆はこれを許さず争論となり、終には京都所司代の官命を蒙る仕儀となった。それを『三国毘尼伝』は「官吏板倉周防守某聞<sup>7</sup>双方聖教據<sup>8</sup>判云互有<sup>9</sup>聖教明<sup>10</sup>抛<sup>11</sup>自今以後良永苾芻、任<sup>12</sup>自性誓受所<sup>13</sup>據文理<sup>14</sup>皈<sup>15</sup>南山<sup>16</sup>於<sup>17</sup>真別処<sup>18</sup>建<sup>19</sup>一夏竟離依止之法<sup>20</sup>當<sup>21</sup>護<sup>22</sup>二利<sup>23</sup>慧雲友尊<sup>24</sup>苾芻<sup>25</sup>依<sup>26</sup>律五<sup>27</sup>為<sup>28</sup>抛文理<sup>29</sup>於<sup>30</sup>榎尾山<sup>31</sup>立<sup>32</sup>五夏依止之軌<sup>33</sup>應<sup>34</sup>守<sup>35</sup>戒律<sup>36</sup>」と伝える。官命は良永の主張を認め、南山真別処において一夏竟離依止法を建てることを許し、榎尾山では五夏依止を法軌として戒律を守ることを命じたのである。

良永が宣揚した一夏竟離依止法は、わずか一夏によって容易に比丘になることを可能にしたから、宗門を超えて人が集まり、戒律復興の大流となった。やがて良永は法隆寺北室院の知事職を兼務して多くの俊英を輩出したから、当時最も高名な律匠と仰がれた。良永から受戒した僧には曹洞の鈴木正三（石平山恩真寺）、臨済の一絲文守（瑞石山永源寺中興一世）・如雪文嚴（同二世）、真言律の真政円忍（円通寺二世）・快円慧空（大鳥山神鳳寺二世）など枚挙に遑がない。

なお明忍と良永の絶海の孤島対馬での出会いは劇的であるが、それはいうまでもなく戒山撰『賢俊永律師伝』の脚色であって、良永の一連の言動を考えれば両師の出会いがたまさかの偶会などではなかったと理解でき、良永の深謀遠慮が垣間見える。すなわち良永は高野山の学侶として真言密教の奥旨を窮め、毘尼の道を志したところからすでに律僧養成の新しい僧制として一夏竟離依止法を練り上げていたと推量される。大悲覺盛と興正叡尊が「九夏の和尚は得戒得罪」の規定を犯して別受比丘戒を授けた事績を、一夏竟離依止法の論拠としているからである。楨尾山で受戒すれば五夏を過ごさねばならぬ。それを避けるためには対馬において国禁の解放をひたすら待ち続ける明忍から受戒するのが得策であり、かつ戒律復興の象徴的存在である明忍から受戒するのが至高の受法であると判断したのである。おそらく良永は明忍から受戒してのち一臈を経た時点ですぐさま一夏離竟依止法を主張する心算であったと思われる。対馬における両師の対面は、決してたまさかの偶会などではなく、賢俊良永の深い意図をもつての邂逅であった。なお良永が京都道者明忍と面謁するについては、添氏を出自とする対州吏史の子というその出自が重く作用したはずである。

※

明忍の遺骸を荼毘したのは従者の道依だった。『仮名行状』『行業曲記』や西明寺藏『開山塔之図』の「軸裏書」(元禄十六年(一七〇三)六月七日、智本理澄識)が伝えるように、道依は明忍の遺命に従い如法に荼毘し、標の松樹を植え、遺骨・遺品を背負って西明寺に帰山したのである。なお明忍は宮谷居住のころ仏性院日奥と庵室を隣していたと『海岸寺縁起』が記している。不受布施派の祖日奥(一五六五—一六三〇)は徳川家康から対馬流罪に処せられ慶長四年(一五九九)から元和九年(一六二三)まで十三年間流

謫の日々を送っている。日奥の宮谷草庵は低丘中腹の閑静で小綺麗な住居で、それは対馬十九代藩主宗義智より贈られたものであった。その跡地には現在「南無妙法蓮華經 中祖日奥上人謫居之靈地」と刻まれた石碑が建っているが、ここは十六代藩主義調すなわち一鷗公の隠居所である白川屋形の跡地であって、それを二分割した一隅に明忍は止住していたのである。不受布施義は他宗と交わらないというが、都を離れ絶海の孤島に日々を送る求道僧と流謫僧に交流があったとしても不思議はなく、現に西明寺藏『祖師之消息』には二人の交流の数条が記されている。

※

右の『開山塔之図』の「軸裏書」に次のような一文がある。<sup>10</sup>

吾祖明忍和尚慶長十五年抄夏七日 示寂于馬島茅壇沙弥道依就壇荼毘 負靈骨施建於本山馬島閣維之所 不豎一浮圖只栽松樹一株而已尚 存矣今茲元禄癸未歲與衆相議命工 礱密石造五輪塔婆一基徵銘於峨山 月潭禪師鐫之背上托建仁松堂長老 相國別宗長老東福雪堂西堂告對州 太守舟載運送樹立彼所而為永世之標識也 (中略)

昔 元禄十六年歲次癸未六月初七日 法孫比丘智本理澄謹書

ここに明忍の忌日と従者道依による葬事一切の仕業が知れるが、さらに明忍歿後九十余年にして漸く対馬に墓塔が建立された経緯が明らかである。すなわち明忍律師の遺業を永世に伝える標識とすべく対馬に石造五輪塔婆一基を建立するのは西明寺一山の合議によるのであり、墓塔裏面の銘文は以前に『行業曲記』を撰している黄檗の禅僧月潭道徹の撰文であり、これを蘭谷元定が書丹したものを石工が稠密に刻字したのである。京洛で仕立てた墓塔を船便で輸送し、これを対馬島内に安置するの許可は対州修文職として以酹庵輪番を経歴した京都五山の建仁寺松堂宗植長老・相國寺別

宗祖縁長老・東福寺雪堂令研西堂の三師が対馬藩主に申請して得たのである。

現在対馬豊満岳山中に建つ花剛岩の石造墓塔は、四角柱の竿石の正面に五輪塔を浮彫し、中央に五輪の悉曇五文字 $\text{अमममम}$ と、地輪の左右に分けて「槇尾中興開山／俊正明忍和尚」の陰刻がある。墓塔は二重の台石を含め高二七〇糎、幅一二〇糎ほどの堂々たるもので、裏面には篆書体で「中興／槇尾／山西／開寺／俊正／明忍／律師／塔銘」と横書きされ、その下に「西明寺俊正明忍律師塔銘」と題する月潭撰の銘文十九行があり、末尾に「元祿十六年歲次癸未季春穀旦窆山直指嗣祖沙門道澄月潭和南撰文含玉山房元定蘭谷和南篆額書丹／遠孫比丘智本理澄雲松實道等全替首百拜勒石」と陰刻され、この墓塔の製作と建立が西明寺十六代衆首智本理澄と派下城南加茂現光寺中興雲松實道の合力によるものと知れる。石工が鐫刻するにあたって月潭撰の銘文を書丹した蘭谷元定の名は『開山塔之図』『軸裏書』に見えぬが、蘭谷が墨書揮毫し、小篆印「家在西山復西」「蘭谷」「白云深處坐禪人」の三顆を捺した篆額が今も西明寺に秘藏されている。蘭谷元定（一六五三―一七〇七）は洛中の衣屋の子で、父に従って黄檗に上り、十五歳のとき月潭の弟子となった。月潭が嵯峨直指庵第二代住持となると、首座を命じられて山内含玉軒に住した。范道生から仏像彫刻を学び、独立性易の伝えた篆刻を能くし、墨画に秀でた。著書に『開戒手鏡』（元祿十四年（一七〇一）三月三日成）がある。宝永四年五月一日、師に先んじて逝った。蘭谷は月潭の最初の嗣法者であって、月潭は「祭含玉蘭谷上座文」（『心華剩録』巻五所収）を草し、深くその死を悼んでいる。

※

智本理澄撰『槇尾山流記』（元祿十四年（一七〇一）四月成）は、元祿十二年八月、「槇尾山再興之儀」につき、これを許可する大檀越徳川五代將軍綱吉公母君桂昌院

殿宗子大夫人の尊書通達を受けるや、一山ではただちに諸堂舎の普請・修理が始められたと伝えている。その元祿十三年六月条に「鐘樓堂挽直御修覆」と見える。この鐘樓堂が現存する鐘樓で、そこに後掲する月潭撰『山城州葛野郡槇尾山西明律寺平等心王院鐘銘』<sup>并序</sup>（正徳二年（一七二二）夏成）を四面の池間に刻んだ大鐘が吊り下げられている。その『西明寺鐘銘』に「寛文十二年子年新鑄鉅鐘施主乃永源一絲禪師之徒一通妙愚公也公初棲止于西山善峯後移居于相樂中村與大智寺本寂律師来往密邇因茲托于律師喜捨淨財若干両以造鐘及樓又送所持佛舍利一百餘粒以令供養現今安置于堂内焉」とあって、この大鐘鑄造の施主は臨濟宗瑞石山永源寺第九十一世一絲文守（一六〇九―一六四六）の弟子の一通妙愚公だと伝えている。妙愚は初め天台宗西山善峯寺にいたが、後に山城国相樂中村に移居し、木津郷の橋柱山大智寺を中興した本寂房惠澄（西明寺十三代衆主。延宝四年（一六七六）十一月二十一日没。文智女王戒師）と密に往来し、その因縁から妙愚は惠澄に喜捨若干両と仏舍利一百余粒を托したのだという。

なおその寄進は万治四年（一六六二）二月のことであつたと思われる。西明寺文書中に『奉寄進 山城州槇尾平等心王院佛舍利事』<sup>12</sup>切紙一通が伝わり、それには「右其、數合一百粒也白、色六如芥子、強半<sup>ナリ</sup>是<sup>レ</sup>和州招提寺、舍利、之分散也」等々とあり、巻尾に「□治四年辛丑二月吉日 一通妙愚也」とあって、喜捨若干両と同時に奉納された仏舍利一百粒の寄進日が知れるからである。とすれば寛文十二年（一六七二）の大鐘新鑄・鐘樓新造の完成までにおよそ十二年の長年月を要したことになる。その完成の報を妙愚は耳にし得たかどうか。妙愚は同年一月二十日に没している。

※

一通妙愚は西山善峯寺阿弥陀堂の再建願主という。同寺蔵『寛文十三年

棟札』（略称『棟札』）は妙愚の事蹟を伝えている。その表中央に「**奉再興**常行三昧堂施主一通妙愚禪師也不足慶加寺中常住物造立之者也柱立寛文十三<sup>丑癸</sup>歳七月七日上棟同月二十五日也」と大書一行、その左右に「妙愚禪師者肥前國人三宅氏高德後胤師匠興聖寺開山圓耳禪師也愚師報八十三歳而寛文十二<sup>子壬</sup>歳正月并日逝然此堂依彼遺命寺僧／成就坊堅盛法印宝光坊義證實相坊賢鎮松本坊豪陳谷之坊□□円月坊宇辨本願惠春令建立之者也」と記されている。これによつて妙愚が肥前の人で三宅氏、高德すなわち南朝の忠臣児島高德の苗裔で、興聖寺開山圓耳禪師の弟子だったという。さらに妙愚が常行三昧堂の完成を待たず寛文十二年（一六七二）一月二十日に八十三歳で歿したため、一山僧衆が資金の不足分を補い、漸く寛文十三年七月二十五日に上棟したと経緯を記し、ついで妙愚の遺命を守った寺僧数名を録している。なお善峯寺文書中に妙愚の歿後百余年後の天明元年（一七八二）五月に善峯寺僧賢慧が撰した妙愚の略伝がある。『西明寺鐘銘』や『棟札』を補う記述があつて有用である。以下に示す。

一通禪師傳 山城國宇治郡興聖寺中興善峯阿弥陀堂再建之願主

禪師諱妙愚一通其字也肥之前州人俗姓三宅氏備後三郎高德之苗裔而幼懷出塵遂謁万安禪師難染螢雪甚勤矣也安名 円耳、山城州宇治郡佛徳山觀音導利院興聖寶林禪寺中興之師也通何由縁卜居於吾山年尚焉又依與喜明和尚為莫逆屢掛錫於金藏師嘗得南京招提寺所藏之分舍利尊寧之多年而偶拜開山上人持念之佛舍感戴之餘以自所奉之分舍利一百顆明歷丁酉之春永寄附之鎮此地衆欣然皆頂礼乃与上人所持舍利並真一寶塔中其光粲然宛如法華寶塔品時釈迦多寶坐塔中二佛星輝矣又万治<sup>戊戌</sup>於小塩村之地、買腹田一所備於香燈爾來山衆春秋二時開其法筵礼讚舍利于今不絶禪師生涯所撰述書頗多今僅存者盲杖記缺唇嘯十界由来、名一卷其書也書以國語且徃々引倭歌便於白衣兒女後來以其易讀為一箇艸紙莫空

領過良自順愍物情深何能致于此乎。師素不局於自宗切劘契乎西邁就其書可觀永明所謂有禪有淨土猶如戴角虎者於戲唯禪師之謂乎於其解語之他位非吾黨所敢測知矣通嘗投施黄金若干欲造營常行三昧堂一寓其願未充染病鍼藥無効臨末之期畱自像而加遺偈於其上泊然而化實寛文十二季壬子春正月二十日也。壽八十有三矣其偈曰起居動靜是何者八十餘年夢裏賓蹈却禪床押足睡寂然無偽又無真和歌曰、此本土乃忘想布久呂蹈屋不里於乃加物土天一物茂奈志其墨痕存于今尤足可賞闔衆依師遺語頻事土木明年癸亥之秋七月上棟二十又五日落慶遂果師之志矣抑傳之所爲豈正此哉前所輯畧記<sup>余</sup>所聞而已

維時天明紀元歲次辛丑五月二十有八日維西沙門賢慧謹誌。

右の『一通禪師傳』は『棟札』のいう興聖寺開山圓耳禪師を曹洞宗初開道場たる宇治の觀音導利院興聖寶林寺の中興開山万安英種（一五九一—一六五四）だと伝える。『西明寺鐘銘』は妙愚を一絲文守の徒という。しかし万安英種また一絲文守の法脉に一通妙愚の名をいまだ見出せないでいる。

妙愚はまた明暦三年（一六五七）春、善峯寺に舍利一百顆を寄進したという。その舍利はかつて南都唐招提寺から分与されたものというから、万治四年二月に西明寺に寄進した舍利一百粒と一連のものである。妙愚は善峯寺開山源算上人（九八三—一〇九九）が念持されていた仏舍利を偶々拝見した折、その余りの有難さに感戴し、ついで多年尊奉秘藏する招提寺分与の舍利を寄進したのである。そこで善峯寺は源算上人と妙愚禪師施入の舍利を併せて一宝塔に収め、春秋二季の供養会を執行したのであるが、妙愚は翌万治元年（一六五八）小塩村（大原野小塩村であろう）の腹田一所を購入し、これを舍利供養会の香燈料として施入したという。妙愚は詩歌に親しみ、その『盲杖記』『缺唇嘯』『十界由来』などという著作は流通したらしい。妙愚が善峯寺に長居し、金藏寺にしばしば掛錫したのは喜明和尚との莫

逆の法縁によるのである。善峰・金藏の両寺はともにその中興を桂昌院の義兄と伝えている。すなわち太白洞無知散人撰『本庄家系譜並歴代略傳』<sup>13</sup>は桂昌院の父本庄太郎兵衛宗正の後裔条に「猶子喜明 貞享三年二月朔日遷化／六十九才金藏寺入龜山に葬す／金藏、善峯兩山中興の祖」とあって、桂昌院の義兄の名を喜明と伝え、また善峯寺文書中の『桂昌院一位尼傳』は「父ハ本庄太郎兵衛藤原宗正母榮女姓氏ヲ詳ニセズ寛永四年洛ノ堀川聚楽ニ生ル六才ニシテ義兄西山善峯寺成就坊賢海ノ許ニ母ト共ニ客タリ」とあって義兄の名を成就坊賢海と伝える。九品院徳演撰『三河往生驗記』<sup>（明治十九年三月十日、三州荒井山九品院藏版）</sup>上巻冒頭に「天台宗の帰命房の法印ハ道心堅固の聖にておはしましき。北小路家の人にして一品禪尼の桂昌院殿。一位をいふ。從常廟位を申奉る。御兄なり。常廟常憲院殿。一位をいふ。にハしたしき御中にいまそかりし。東坂本西教寺に住せられしかど。寺務かしましとてミつから隠通しておはしける」と、常憲院殿すなわち徳川五代將軍綱吉と親しかつたという桂昌院の兄帰命房法印はもと天台真盛宗戒光山西教寺の住僧だったと伝え、さらに金藏寺においては喜明上人は西教寺第十五世真教上人がその人だと伝えている。<sup>14</sup>しかし西教寺十五世は天海僧正に親近した真迢（一六五九年没）であつて、西教寺歴代に真教の名はない。

なお桂昌院（一六二七―一七〇五）は六歳のとき善峯寺に仮宿していたというが、『本庄家系譜並歴代略傳』が伝える義兄喜明はその時十五歳の少年であつて、坂本西教寺を経歴して隠通した人とは思われない。いずれにしても桂昌院の義兄については不明な点が少なくない。その名はしばらく措くとして、桂昌院の義兄とされる人物と一通妙愚が昵懇であつたという伝聞は知っておいてよからう。

※

元禄十六年十二月、おそらくその十五日に俊正明忍律師の墓塔が入滅の

地、対馬茅壇の茶毘処跡に建立された。『海岸寺縁起』に海岸寺八世速譽専栄が西明寺上座衆中に宛てた同年十二月十五日付の消息が収められている。その一節に「海陸無異事到着仕候依之御碑石茅壇<sup>三</sup>造立成就仕候其節<sup>ハ</sup>以酛雪堂和尚<sup>江ノ</sup>御出被添法慮候落成以後弥以當掛貴賤之仰信墓參之絡繹不絶候」とあって、墓塔を乗せた便船が無事に到着し、これを設置建塔したときには以酛庵三十四世輪番東福寺龍眠庵の雪堂令研の立会があつたこと、建塔については三十三世輪番相国寺慈照院別宗祖縁の尽力があつた等々が報告されている。<sup>15</sup>速譽専栄は別宗祖縁にも同日付の消息で建塔成就の報告をしている。こうした松堂宗植・別宗祖縁・雪堂令研・海岸寺速譽らの活躍を知ると、建塔当日いかに遠方とはいえそこに西明寺僧衆一人の参会がなかつたことは、明忍墓塔の建立すなわち弘律始祖俊正明忍律師を顕彰する事業が西明寺一山ではなく、対州修文職以酛庵輪番を経歴した五山僧たちの主導によつて行われたことを象徴している。別宗祖縁は以酛庵着任後の翌元禄十四年六月七日、茶毘処跡で忌日法要を営んでおり、雪堂令研は一周忌法要を以酛庵・海岸寺の衆僧らと執行している。その姿勢を想えば、『明忍律師塔銘』の一節に「但對陽遺蹟未能建置一浮圖是為缺典茲者上座比丘智本澄公與衆相議命工鑿密石造五智輪塔婆一基」と、対馬に明忍の塔婆がないのは典礼を欠いていると月潭や五山僧たちが指摘し、その建立を西明寺上座比丘智本理澄に蹤憑していることも得心がゆく。

「槇尾山再興之儀」の名のもとに元禄十二年に大檀越桂昌院の寄付を受けるや西明寺山内の堂塔伽藍の修理修覆に励んだが、茶毘処跡に明忍墓塔を建立することが槇尾山再興之儀の最後の事業になつたのは、それが当初の計画にはなかつたからである。おそらく一山僧衆は、およそ百年前、従者道依が明忍の靈骨を背負つて帰山して間もなく槇尾山中に明忍の墓所が築

かれていることをもって、対馬にも明忍の墓塔を建立することなど毫も考えてはいなかったのである。そも明忍を「興律始祖」「弘律始祖」と声高に讃頌し出したのは日蓮宗深草瑞光寺の元政上人や黄檗宗嵯峨直指庵の月潭道漱ら他山僧であった。月潭は『西明寺鐘銘』に「自寛文壬子至正徳壬辰既鐘四十載而其鐘未有銘豈非缺典乎爰現前比丘衆等請余作銘因為之」と鐘銘を作文した経緯を記しているが、西明寺比丘衆に「其鐘未有銘豈非缺典乎」と梵鐘には鐘銘を、墓塔には墓碑銘を記すべきの意義や規範を教示したのは月潭その人であつたと思われる。黄檗僧たち五山僧たちが成稿した各種銘文は極めて多く、その作法と行儀は彼らの得意とするところであつて、現に対馬に明忍墓塔が建立されたことを祝した五山僧たちの自筆の詩偈が西明寺と海岸寺に秘蔵されている。たとえば西明寺蔵『對州諸師和韵等』（二卷）は対州修文職以酹庵輪番僧たちの詩偈を集めたもので、輪番と出身寺院を記すと、<sup>29</sup>天竜寺 妙智院 雲外東竺・<sup>32</sup>慈雲庵 太虚顯靈・<sup>32</sup>天竜寺 延慶院 古靈道充・<sup>34</sup>建仁寺 松堂宗植・<sup>36</sup>相国寺 天啓集仗・<sup>38</sup>東福寺 松隠玄棟・<sup>40</sup>天竜寺 中山玄中・<sup>41</sup>相国寺 清住院 雪堂令研ら九僧の詩偈が収められており、また『五山諸別宗祖縁』<sup>42</sup>東福寺 龍眠庵 雪堂令研ら九僧の詩偈が収められており、また『五山諸徳香偈』（二卷）には別宗祖縁・妙心寺瑞堂本潦・妙心寺仁溪慧寛・妙心寺無着道忠・妙心寺禅局宗柱・大徳寺梅岑玄彭ら六僧の詩偈が収められている。さらに『海岸寺縁起』には建塔を祝する詩偈を海岸寺に寄せた三十六余の僧名が記されているが、島内止住の僧俗二名を除くと、西明寺智本理澄以外はすべて五山僧なのである。なお『對州諸師和韵等』は雪堂令研が、<sup>16</sup>

『五山諸徳香偈』は別宗祖縁が主導編纂したものと思われる。

いうまでもなく槇尾山における諸事業が恙なく成就したその根源には、月潭が『明忍律師塔銘』に「蒙桂昌院國太夫人懿恩鼎建殿宇極輪奐之美且賜目僧糧若干石律門榮盛蔑加是時」と記すように、大檀越桂昌院の施財が

あつた。なお『槇尾山流記』元禄十三年条に「六月廿三日巳ノ刻上棟岩倉善峯僧衆兩人并今宮神主為賀儀登山」とあり、再建本堂の上棟慶賀のため今宮神社・岩倉金蔵寺・西山善峯寺から来山があつたという。今宮神社は元禄七年に桂昌院の寄付二百石をもつて再建され、<sup>17</sup>金蔵・善峯の両寺はともに桂昌院を大檀越に仰ぎ、ともにその中興を桂昌院の義兄だと伝える。その義兄と昵懇だったという一通妙愚は善峯寺の常行三昧堂再建、西明寺の大鐘鑄造に大きく貢献している。妙愚はまた賢俊良永から受戒した一絲文守の徒弟だったという。桂昌院という大樹を巡って縦横無隅に法縁が結ばれていた光景が彷彿する。想えば慶長地震で崩壊した唐招提寺戒壇の元禄九年再建に率先尽力したのは桂昌院だった。桂昌院は律苑にふかく執心し、鑑真将来舍利瓶塔を江戸城に勧請するなどその帰依信心は懇篤だった。<sup>18</sup>一通妙愚はその鑑真将来舍利を不思議にもなぜか大量に、それもずつと以前から尊奉秘蔵していた。『明忍律師塔銘』『西明寺鐘銘』をめぐって、近世戒律復興の盛衰の一端を垣間見ることができる。（関口）

# 注

1 『明忍律師塔銘』は西明寺蔵版無刊記本『明忍律師行業曲記全』に付載があり、また『心華剩録』巻五に『明忍律師塔銘』『西明律寺鐘銘』の収録がある。但しいずれにも付訓がある。『心華剩録』は月潭歿後、その著作を直指庵三世覺天元朗が正徳五年仲槐に編纂したもの。全五巻。享保六年古川三郎兵衛版がある。なお月潭自筆『西明律寺鐘銘』は稲城伸子代表『日本における戒律伝播の研究』（二〇〇四年三月、元興寺文化財研究所）所載『西明寺所蔵聖教類』に未載の資料である。

2 東京大学史料編纂所蔵『西明寺文書』（影写本）に拠る。

- 3 平楽寺編纂局編『標註艸山集全』（昭和五年十一月、平楽寺書店）に拠る。
- 4 関口静雄・高松世津子「槇尾山西明寺蔵月潭道徴自筆資料―『明忍和尚行業曲記』翻刻と解題」（『学苑 昭和女子大学紀要』令和三年九月号）に拠る。
- 5 対州修文職および以酌庵輪番については、田中健夫氏『全近代の国際交流と外交文書』（平成八年十月、吉川弘文館）と池内敏氏『絶海の碩学―近世日朝外交史研究』（二〇一七年二月、名古屋大学出版会）の研究成果に負っている。
- 6 関口静雄・山本博也編『律苑僧宝伝』（唐招提寺・律宗戒學院叢書第二輯、平成十九年二月、昭和女子大学近代文化研究所）に拠る。
- 7 板倉周防守某について、これを藤谷厚生氏「近世初期における戒律復興の一潮流―賢俊良永を中心に」（『四天王寺国際佛教大学紀要』大学院第二号、二〇〇三年三月）は板倉周防守重宗と特定された。
- 8 『興正菩薩御教誡聴聞集』（日本思想体系『鎌倉旧仏教』所収）嘉禎二年条参照。
- 9 大島精一氏「日興上人」（『対馬歴史民俗資料館報』第十七号、平成六年三月）。
- 10 前掲「西明寺所蔵聖教類」No. 384 所載の翻刻に拠る。
- 11 墓塔の計測は、竹村正氏『嚴原町久田道西丘在』京都槇尾山真言宗西明寺中興の祖俊正明忍律師の墓』（昭和五十二年六月、自刊）に拠る。
- 12 前掲「西明寺所蔵聖教類」No. 8-11。高松世津子氏の御示教によれば、内題は『奉寄進 山城州槇尾平等心王院佛舍利事實』とあり、「是<sub>レ</sub>和州招提寺ノ舍利ノ分散也」等々ある由である。
- 13 桂昌院奉賛会編『桂昌院』（昭和二十九年二月、金蔵寺）に所収。
- 14 北村隆圓氏（金蔵寺十九世）『桂昌院様の二百五十年御忌を迎へるに當つて』（前掲『桂昌院』「追補」に所収）。
- 15 西明寺蔵『對海岸精舎俊正律祖墓所建塔已来諸記録』（本瑞晃白自筆。文化六年七月成）に、元禄十四年六月七日に別宗祖縁が営んだ忌日法要の諷誦文が載る。それによると、従者道依は葬送闇維を如法に執行し、その折り植樹した標の松の根元には遺骨数片を埋納したようである。別宗祖縁は茶毘処跡を茅壇墓

所と呼んでいる。

- 16 『東福寺誌』（一九三〇年、大本山東福禪寺）元禄十六年十一月二十一日条に「雪堂令研『明忍塔銘偈』を撰す」とあり、「東福雪堂賀修明忍塔偈有序」として偈の冒頭を引いている。雪堂は以酌庵在任中にこれを撰述したのである。

- 17 今宮神社蔵『元禄六癸酉載日記』元禄七年条。

- 18 唐招提寺蔵『招提千歳伝記』巻下「旧跡篇」「靈宝篇」等。

#### 〔翻刻凡例〕

- 1 翻刻資料には行頭あるいは行尾に五行ごとの通番号を付した。
- 2 可能なかぎり原文の表記を尊重した。
- 3 翻刻文の素稿は関口が作成し、資料調査と撮影は高松が単独で行った。

#### 〔追白〕

掃部光淳師・石川覺應師・藤谷厚生氏・武田柊馬氏から貴重な資料の提供を受け、田熊信之氏から文書解説につき御示教を受けた。記して御礼感謝申上げる。

#### 〔追白〕

脱稿後、森 慈尋氏『一通妙愚について（第二報）』（二〇二二年三月、龍江山松雲寺）を知った。それによると、臨済宗興聖寺派の龜山市千歳町所在の千年山東光寺所蔵の興聖寺派の宗派図である『佛祖脈譜』（版一幅。裏面に「万延元庚申年林鐘日」等々の墨書がある）に京都市堀川通所在の臨済宗圓通山興聖寺開山虛應圓耳の直弟子六名中の五番目に「幽谷一通妙愚」の記載がある由である。月潭の西明寺「鐘銘」、善峯寺賢慧の「一通妙愚傳」とは相違する新出所伝で注目される。なお興聖寺現蔵の一切経は慶長年中虚應圓耳の時代に笠置の海住山寺から譲渡されたもので、それは戒律復興に尽瘁した笠置上人解脱房貞慶旧蔵の蔵経だった。すなわちこれの取得は圓耳及び一山の戒律復興への深い関心を示している。



西明寺鐘樓



明忍律師墓塔（裏）



明忍律師墓塔（表）

中興 槓尾山西明寺俊正明忍律師塔銘

婆伽世尊以一切種智統攝三界必先立戒法大心薩埵以六波羅蜜誘化衆生不能捨律儀固知戒是作佛之階梯濟人之舟航也然

中興

槓尾

山西

明寺

俊正

明忍

律師

塔銘

本邦律宗權輿于唐鑑真和上再盛于興正菩薩興正滅後數百年間戒法浸衰寥寥無聞丁此澆季之穢駕大願輪扶起律幢者唯俊正律師其人也師諱明忍俊正其號平安城中原氏子世為宦族父名康雄仕為少內記母某氏有淑德師生而穎異有神童之譽十六歲抱出塵志而親愛繫絆未果所願二十一歲決意出家即投高雄晉海僧正薙髮稟受密法勤脩弗懈師恒慨此土律法衰頹志圖興復竟往南京西大寺咨決持犯於耆宿鞠明究曉頗通其學越偕慧雲友尊二師入梅尾山祈好相依大乘三聚通受法自誓受戒時年二十七及觀槓尾幽邃清絕而卓錫於其間四方學律之輩慕風駢臻未幾大成法社三十一歲發別受相承之願欲入大唐尋師孤錫飄然到對馬州以謂先赴三韓次抵中華然以國禁森嚴故不得逾海姑留寓對陽結廬於茆壇清苦自居經歲對人稍知有師呼曰京都道者迄庚戌夏遽染微疾杪夏七日昧爽自知期至執小磬槌敲坐墩驟唱佛號泊然而逝沙彌道依遵治命荼毘于山上收靈骨擔道具獨回槓峰一衆哀慟如喪恃怙焉師生于天正丙子寂于慶長庚戌報齡三十有五僧臘一十有五嗚呼師去世僅九十餘稔而兒孫繩繩徧布寓內槓峰精舍頃歲蒙桂昌院國太夫人懿恩鼎建殿宇極輪奐之美且賜以僧糧若干石律門榮盛蔑加是時但對陽遺蹟未能建置一浮圖是為缺典茲者上座比丘智本澄公與衆相議命工礱密石造五智輪塔婆一基將欲舟載運送樹立彼所而為永世之標幟乃來徵銘於余先是余撰律師行業記克詳其由故不以不文辭略叙平生梗槩系之以銘銘曰

佛設三學 戒為洪基 人天崇奉 衆聖咸規 海東之國 戒日輝騰 鑑真肇授 叡尊重弘 數百載後 僧風淪替 不有忍師 孰救其弊 志鋒銳利 行璧無瑕 槓峰領衆 專唱開遮 自誓雖審 別受失傳 飛求法錫 抵對陽堦 鷄林在望 震旦奚適 國禁嚴重 末由泛舶 滄溟萬里 徒勞遐想 島陰締茆 姑此棲養 世緣俄盡 為清泰遊 幻生幻滅 於師何憂 但惜律苑 早喪著龜 遵西竺法 就處閹維 遺蹤蕪沒 後代疇識 粵鏡宰堵 樹海旰側 金跣正體 獨露巍然 山靈衛護 永勿改遷 元祿十六年歲次癸未季春穀旦我山直指嗣祖沙門道澄月潭和南撰文 含玉山房元定蘭谷和南篆額書丹

遠孫比丘智本理澄雲松實道等仝稽首百拜勒石

臨濟正宗

01 槓尾山西明寺俊正明忍

律師塔銘

婆洳世尊以一切種智統攝  
三界必先立戒法大心薩  
埵以六波羅蜜誘化衆生

05 不能捨律儀固知戒是作

佛之階梯濟人之舟航也然  
本邦律宗權輿于唐鑑真  
和上再盛于興正菩薩興

10 正滅後數百季間戒法浸衰

寥々無聞丁此澆季之秋駕大

願輪扶起律幢者唯俊正

律師其人也師諱明忍俊正

其號平安城中原氏子世

15 為宦族父名康雄仕為少

內記母某氏有淑德師生而

穎異有神通之譽十六歲抱

出塵志而親愛繫絆未果

所願二十一歲決意出家即投

20 高雄晋海僧正薙髮稟受

密法勤修弗懈師恒慨此

士律法衰頹志圖興復竟

往南京西大寺咨決持犯於耆  
宿鞠明究嘿頗通其學越

25 偕慧雲友尊二師入槓尾山

祈好相依人乘三聚通受法

自誓受戒時年二十七及觀槓

尾幽邃清絕而卓錫於其間

四方學律之輩慕風駢臻未

30 幾大成法社三十一歲發別受

相承之願欲入大唐尋師孤

錫飄然到對馬州以謂先

赴三韓次抵中華然曰

國禁森嚴故不得逾海姑留

35 寓對陽結廬廡於茅壇而

清苦自居經歲對人稍知有

師呼曰京都道者迄庚戌夏

遽染微疾杪夏七日味爽自

知期至執小磬槌敲坐墩驟

唱佛號泊然而逝沙彌道依

40 遵治命茶毘于山上收靈骨擔

道具獨回槓峰一衆哀慟如

喪恃怙焉師生于天正丙子寂

于慶長庚戌報齡三十有五僧

45 臘一十有五嗚呼師去世僅九十

餘稔而兒孫繩々遍布寓內槓

峰精舍頃歲蒙

桂昌院國太夫人懿恩鼎建

殿宇極輪奐之美且賜呂僧

50 糧若干后律門榮盛蔑加是

時但對陽遺蹟未能建置一浮

圖是為缺典茲者上座比丘智本

澄公與衆相議命工礱密后

造五智輪塔婆一基將欲舟

55 載運送樹立彼所而為永世

之標幟乃來徵銘於余先是

余撰律師行業記克詳其由

故不以不文辭畧敘平生梗槩

系之以銘銘曰

60 佛設三學戒為洪基人天

崇奉衆聖咸規海東之

國戒日輝騰鑑真肇授叡

尊重弘數百載後僧風淪

替不有忍師孰救其弊志

65 鋒銳利行璧無瑕槓槓峯領

衆專唱開遮自誓雖審別

受失傳飛求法錫抵對陽堦

鷄林在望震旦奚適 國禁

嚴重末由泛舶滄溟萬里徒

70 勞遐想島陰締茅姑此棲養

世緣俄盡為清泰遊幻生幻

滅於師何憂但惜律苑早

喪著龜遵西竺法就處闍

維遺蹤蕪沒後代疇識粵

鏡宰堵樹海岸側金剏

正體獨露巍然山靈衛護

永勿改遷

元祿十六年歲次癸未季春

穀旦

峩山直旨嗣祖沙門道澄

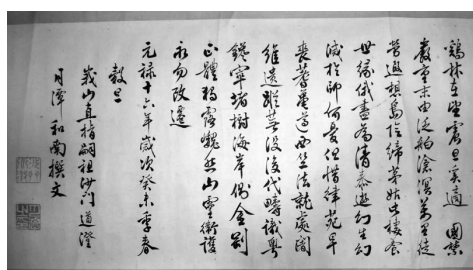
月潭和南撰文

沙門  
道澄

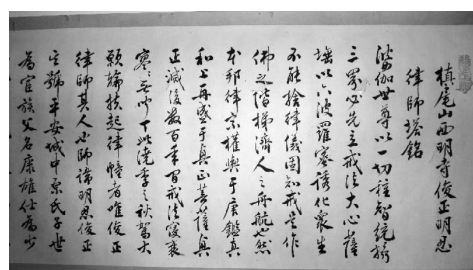
月潭  
之印



蘭谷筆『篆額』



月潭筆『明忍律師塔銘』(尾)



月潭筆『明忍律師塔銘』(首)

臨濟正宗

01 山城州葛野郡槇尾山

西明律寺平等心王院

鐘銘并序

05 凡禪教律寺法器之制莫

先於鐘故建刹安僧不論

大小必先庀焉況如律院

晨昏誦梵涉月布薩等一

切做佛事時皆鳴之以肅

衆加旃警昏衢之長夜息

冥趣之苦輪厥功利博大

豈易量哉槇尾山西明律

寺於寛文十二壬子年新

鑄鉅鐘施主乃永源一絲

15 禪師之徒一通妙愚公也

公初棲止于西山善峯後

移居于相樂中村與大智

寺本窳律師來往密邇因

茲托于律師喜捨淨財若

干兩以造鐘及樓又送所

持佛舍利一百餘粒以令

供養現今安置于堂內焉

自寛文壬子至正徳壬辰

既經四十載而其鐘未有

銘豈非缺典乎爰現前比

丘衆等請余作銘因為之

銘曰

維之乾方 巖巒幽邃

有大蘭若 號西明寺

介雄梅間 最為靈區

山水清淑 塵氣全無

曩昔智泉 剎營梵宇

忍師重興 律幢大豎

祇樹林茂 苾芻草繁

終南風致 迄今猶存

王妣婦崇 堂構煥炳

晨香夕燈 僧規嚴整

樓簾華鯨 愚公所施

厥音嘹唳 高冲天墀

十方賢聖 随扣來聚

惡趣聞聲 脫幽冥苦

耳根塵消 返聞道成

心王行令 六賊均平

入圓通門 群類怡悅

我銘不文 聊識歲月

45

峇

正徳二年歲次壬辰首夏

吉旦

峨山直指禪菴沙門

月潭道澄敬撰

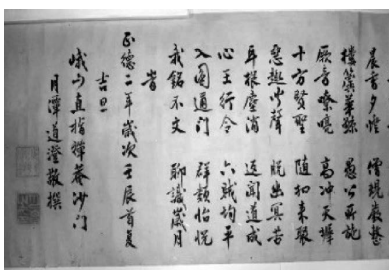
49

沙門

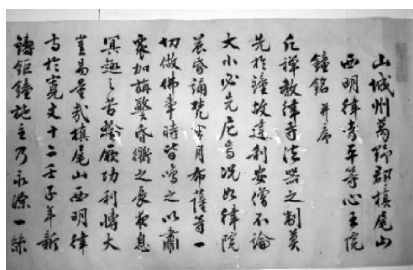
月潭

道澂

之印



月潭筆『西明寺鐘銘』(尾)



月潭筆『西明寺鐘銘』(首)

(せきぐち しずお 本学名誉教授)  
(たかまつ せつこ 名古屋大学大学院博士後期課程)